

北九州市が目指す都市像

令和5年11月22日  
企画調整局

北九州市基本構想 素案

つながりと情熱と技術で、

「一歩先の価値観」を実現する

グローバル挑戦都市・北九州市

ひとの数だけ、スポットライトがある。

だれもが主人公になって、イキイキと

自分の人生をもっと好きになって進んでいく。

一人ひとりに宿る力を、

もっと支え、挑戦を後押しできる都市へ。

積み重ねてきた歴史を、

脈々と継承し、新しい価値を生みだせる未来へ。

多様な個性がまざりあい、つながりあうからこそ

生みだされる価値は、日本のみならず世界へと大きく広がり、

だれもが豊かで安らげる未来をつくっていきます。

つながりと情熱と技術で、

「一歩先の価値観」を実現するグローバル挑戦都市へ。

さあ、愛さずにはいられない未来を、北九州市から。

## 目次

第1章 北九州市の挑戦	3～6
1 北九州市の歩みと個性	3
2 北九州市が考える「一步先の価値観」	5
第2章 目指す都市像の実現に向けた3つの重点戦略	7～10
1 3つの重点戦略による「成長と幸福の好循環」	7
2 3つの重点戦略	9～10
(1)「稼げるまち」の実現	9
(2)「彩りあるまち」の実現	9
(3)「安らぐまち」の実現	10

## 第1章 北九州市の挑戦

### 1 北九州市の歩みと個性

#### (1) 五市合併前

本州と九州各地との結節点という地理的な特性から、江戸時代には、城下町の小倉をはじめ、大里、黒崎、木屋瀬などが宿場町として栄えるなど、北九州地域は、古くから発展を遂げてきました。

大きな転換点となったのは、日本の産業の近代化の礎となった官営八幡製鐵所の操業でした。筑豊の石炭に加えて、アジアに近く、災害リスクの低い強靱な土地や、豊富な水源を有していること、そして何より次世代の産業を創るという地元人の情熱が、明治政府の一大プロジェクトの立地の決め手となりました。

#### (2) 五市合併による多彩な歴史や文化

昭和38年(1963年)、門司、小倉、若松、八幡、戸畑、それぞれ色合いが違う五市が対等合併し、九州初の「百万都市」「政令指定都市」として、北九州市が誕生しました。

- ・陸上と海上運輸の集散地として栄えた九州の玄関口・国際貿易港「門司市」
  - ・城下町時代からの商業・行政等の集積地で広域的な拠点機能を担った「小倉市」
  - ・国内有数の炭鉱地帯・筑豊で産出される石炭の積出港として栄えた「若松市」
  - ・日本の産業革命に貢献した官営八幡製鐵所創業の地「八幡市」
  - ・工業人材教育へ向けて私立明治専門学校(現九州工業大学)が創設された「戸畑市」
- 歴史や文化、祭り、食、暮らしなどの旧五市の特色は、「7区7色の個性」として北九州市の個性となりました。

#### (3)「ものづくり」のまち

官営八幡製鐵所の操業により幕を開けた「ものづくり」のまちとしての北九州市は、重化学工業を中心とする国内有数の工業地帯、また、戦後の日本の高度経済成長をけん引する地として、急速に発展しました。

この勢いが求心力となり、革新的な技術で世界と戦う、進取の気鋭に溢れる起業家が次々と現れ、日本を代表する、株式会社安川電機やTOTO株式会社などの企業が育っていきました。

#### (4) 多様性・包摂性など市民の個性

「ものづくり」のまちとして、国内外から情熱や個性あふれる人々や企業が集まり、人情と包摂性にあふれる北九州市民は、その多様性を受け入れ、チャレンジを応援してきました。

また、外から取り入れた異質な文化と地域の文化が掛け合わさることで、人々の暮らしは豊かで活気のあるものになっていきました。

## (5) 公害の克服

日本の高度経済成長をけん引してきた工業地帯として発展する一方で、激甚な公害も経験しました。

「七色の煙」や「死の海」と評された環境汚染の克服のため、「子どもの健康を守りたい」という強い思いを抱く、婦人会が立ち上がり、それを契機に企業と行政も一体となって公害を克服しました。

こうした「市民力」や「産学官民連携の力」は、現在のまちづくりにも引き継がれています。

## (6) 環境産業の推進

公害克服において、産学官民が総力を挙げて課題解決に取り組んだ結果、環境改善を果たただけでなく、その過程で、環境に配慮しつつ、生産性も向上させる新たな技術を開発しました。

さらに、廃棄物処理と処分場の不足が日本全体で大きな社会課題になる中、廃棄物を原料として、再び資源に生まれ変わらせるリサイクル産業を創出し、「環境と経済」の両立を図ることに成功しました。

リサイクル産業が集積する北九州エコタウンは、日本最大級のエコタウンとして国内外から高く評価されています。

## (7) 環境先進都市から SDGs 未来都市へ

公害克服やリサイクル分野などでの海外技術協力や、上下水道インフラの輸出などを通じて、アジアを中心に環境問題の解決にも大きな貢献を果たしてきました。

公害克服、環境産業の推進、国際技術協力などの歴史のもと、「環境先進都市」として、国内外で高く評価された北九州市は、その後、「SDGs 未来都市」として、環境面のみならず、経済面、社会面を含めた統合的な取り組みにおいても評価されています。

## (8) 「安全なまち」へ

まちを悩ませていた暴力団の影についても、市民・企業・警察・行政が一体となって、暴力追放運動や防犯パトロールに強い決意で取り組んだ結果、暴力団はほぼ壊滅状態となり、刑法犯認知件数は大幅に減少しました。「怖いまち」のイメージは払拭され、北九州市は「日本トップクラスの安全なまち」へ生まれ変わろうとしています。

## 2 北九州市が考える「一步先の価値観」

オイルショック後の「鉄冷え」による製造業の合理化、1980年代半ばの円高による製造業の海外移転などが、北九州市の経済活動を直撃しました。

さらに、工業都市と支店経済都市としての両面を持ち合わせる九州最大の拠点都市でしたが、陸路から空路にシフトする時代に対応できず、企業の流出が相次ぎます。

次第に、人口も減り始め、まちも人も徐々に元気を失ってきました。

少子高齢化に伴う人口減少が急速に進展すれば、社会経済への影響が避けられません。社会経済の中核を担う、いわゆる生産年齢人口が減少することは、企業活動や消費活動が衰退し、経済規模の縮小や国際競争力の低下、さらには、年金や健康保険、医療・介護サービスなど社会保障制度の維持も困難になるなど、市民生活にも大きな影響を及ぼすこととなります。

日本全体でも、少子高齢化の進展により、平成20年(2008年)の約1.3億人をピークに、2050年代には1億人を切ることが予想される中、地方においては、東京圏や地域の拠点都市への若い世代の人口流出などにより、人口減少が深刻化しています。

アジアにおいても、韓国は2020年から、中国でも2022年から、人口減少のステージに突入しています。両国とも日本より合計特殊出生率が低いことから、少子高齢化のスピードはさらに速く、近い将来、人口減少問題に直面すると考えられています。

また、1990年代以降の長く続いた景気低迷の中、個人主義や権利主義の意識の拡大、ライフスタイルや価値観の多様化などにより、かつての共助や互助の精神が薄れ、地域コミュニティの存続も危ぶまれる状況となっています。

さらに、気候変動問題に対応するためのカーボンニュートラルやGX、デジタル化という世界で大きな社会変革の潮流が生まれている中、日本は経済成長や学術振興、女性活躍などの分野において、その地位が年々低下しています。

地方自治体や日本全体、さらには世界が持続的に発展していくうえで、大きな岐路を迎えています。

これまで、北九州市は、明治の産業革命や公害といった時代の変化が他都市に先駆けて現れ、そのたびに市民や企業などの英知を結集し、課題を解決してきました。

また、時代の最前線で、新しいことに挑戦する文化も根付いています。

だからこそ、日本、アジア、そして世界の社会課題の解決のために、何を成しえるのかという視座と使命を備えたまちといえます。

北九州市は、地理的優位性、人の温かさ、技術、インフラなどの数えきれないポテンシャル、また、先人から脈々と引き継がれる、不屈の精神を備えています。

これからも、カーボンニュートラルやデジタル化といった大きな社会変革の潮流に対応していきながら、新たな産業構造への転換などによる経済成長の実現によって、都市の総合力を高めていくことで、こうした様々な社会課題の克服に挑戦していきます。

そして、その経験を日本国内にとどまらず、アジアや世界の国々に向けて発信し、貢献することで、多くの人や企業が集まる活気あふれるまちとして再び輝きを取り戻します。

この挑戦の過程においては、これまでの北九州市の歩みを振り返りつつ、私たちが、未来に向けて、確固たる歩を進めるための拠りどころとなる「一歩先の価値観」が重要となります。

北九州市のこれまでの歩みや強み、都市の DNA などから、北九州市が描く「一歩先の価値観」とは、

- ・市民一人ひとりや企業が自身の持っている力を最大限に発揮する「能力開花（エンパワメント）」
- ・市民が相互に包摂性を持ち、それぞれが望む生活や夢の実現に向けて支え合う「利他の精神（アルトゥリズム）」
- ・地域が直面する課題を地域の力で解決し、活力を取り戻した豊かなまちを次の世代に引き継ぐ「持続可能（サステナブル）」

などであると考えています。

社会経済状況、技術革新はめまぐるしいスピードで変化しています。こうした中においても、北九州市は今後も、時代に先駆けた「一歩先の価値観」を体現できるまちであり続けられるよう、挑戦を続けます。

## 第2章 目指す都市像の実現に向けた3つの重点戦略

### 1 3つの重点戦略による「成長と幸福の好循環」

全国的に少子高齢化が進む中、特に北九州市は政令市の中で最も高齢化率が高く、死亡数が増加していることなどにより自然動態のマイナス幅が拡大し、人口減少が急速に進んでいます。

また、市内総生産額は平成12年（2000年）以降、約3兆8千億円を上限に推移し、その水準や増加率（令和元年度、平成23年度比）は、政令市の中でも下位に位置しています。

市民一人当たりの雇用者報酬で見ても、その増加率（令和元年度、平成23年度比）は、政令市の中でも下位に位置するなど、経済成長も停滞傾向が続いています。

さらに、市の財政状況においても、財政構造の弾力性を示す「経常収支比率」や、財政の余裕度を示す「財政力指数」は、政令市の中でも下位に位置しており、市民一人当たりの「市債残高」（普通会計）は、政令市の中で最も高くなっている状況です。

このように、今、北九州市は、まち全体が活力や元気を失っている状況です。

こうした現状において、まずは、「稼げるまち」の実現に最優先で取り組むことにより、都市の経済力を高め、市外に流出している若者や女性などにこのまちに留まってもらい、市外からの転入者を増やす戦略が重要となります。

このため、まず、北九州市が有する歴史や文化、自然、食、人、産業など、様々な魅力に関する情報を全国の人たちに届け、恵まれた陸・海・空のネットワークを活用して北九州市を訪れていただき、ふれていただき、関心を高め、体験していただく取組みを強化します。

また、ものづくりや環境分野の技術を生かした未来産業の集積や、市内企業の生産性向上、スタートアップの創出など、企業活動の進出や拡大を通じて、誰もが活躍できるまちの実現にも取り組みます。

「稼げるまち」が実現され、年齢や性別、国籍に関わらず、挑戦意欲のある人たちが集まってくことで、物心両面での多様なライフスタイルへのニーズが高まっていきます。

こうしたニーズに対応するためには、民間の投資や開発などを喚起し、魅力的な街並みや住環境、教育環境、文化芸術・スポーツに接する環境、観光などのコンテンツが充実した「彩りあるまち」を実現することが求められます。

「稼げるまち」、「彩りあるまち」の実現による、成長の果実をこのまちに住む人たちの生活の基盤である安全・安心な暮らしの確保につなげるとともに、人々がお互いを尊重し、支え合う包摂的で心豊かに暮らせる「安らぐまち」の実現につなげていきます。

人々を惹きつける「安らぐまち」は、人々が住み続けたいまちであるだけでなく、その魅力によって、市外からもさらに人が集まるまちにつながります。こうして、まちが潤っていく好循環を実現していきます。

「少子高齢化・人口減少」という解決困難な課題に挑戦し、「まちの成長」と「市民の幸福」の好循環というロールモデル（＝課題解決の道筋）を日本やアジアに示して、貢献します。

こうして、日本国内や世界における北九州市の評価を高め、さらに国内外から人や企業を呼び込むまちとなることで、北九州市民の自信を回復し、シビックプライドの向上にもつなげていきます。

私たちは、「人々とのつながり」や、「人情・熱い思い」、そして「ものづくりの技術力」という北九州市のポテンシャルを最大限に発揮して、目指す都市像である『つながりと情熱と技術で、「一步先の価値観」を実現するグローバル挑戦都市・北九州市』を実現します。



## 2 3つの重点戦略

### (1)「稼げるまち」の実現

我が国は今、地球規模の気候変動や、少子高齢化・人口減少など解決が困難な課題に直面しています。

このような中、北九州市は、激甚な公害をはじめ、様々な社会課題を克服してきた人々の情熱や「ものづくり」の技術力など、北九州市が有する様々な経験とポテンシャルを最大限に発揮して、こうした新たな課題の解決にも挑戦します。

その過程において、産学官のさらなる連携により、未来志向の新しい産業の創出や集積を図るなど、「社会課題解決と経済成長の両立」を実現し、それをショーケースとして示すことで、国内外から人や企業、投資を呼び込みます。

さらに、スタートアップ企業の創出の支援に加え、民間主導による、市内企業の生産性向上や高付加価値化などを促進します。

こうして、若者や女性、高齢者も障害のある人も自らの夢に挑戦する意欲ある人々が集い、多様な個性が調和することで、強い経済を実現し、活力あふれる「稼げるまち」を目指します。

### (2)「彩りあるまち」の実現

性別に関わらず、若者も高齢者も、障害のある人もない人も、自らの目標に向かって挑戦する人々が集まり、社会に参加し活躍することにより、まちに活力と賑わいが生まれます。

それにより、人々の生活は豊かになり、消費への意欲が高まります。

こうした人々の、ゆとりある、心豊かな生活に対するニーズに応えるため、民間投資なども活用して、自然と調和した生活環境やまちの空間整備に取り組みます。

また、子ども一人ひとりの個性や多様性が尊重され、持てる可能性を発揮できる教育の推進や、生活を健康で心豊かにする文化・スポーツの振興、そして、豊かな自然と歴史を生かした観光資源の磨き上げなどにより、魅力あふれるまちづくりを進めます。

このことにより、住む人々のまちへの愛着が深まり、感性豊かでクリエイティブな人たちなどを惹きつけるまちになることで、さらに、輝く個性が調和する「彩りあるまち」を目指します。

### (3)「安らぐまち」の実現

「稼げるまち」や「彩りあるまち」の実現により、多様な人々が集い、暮らす時、最も基本的で大切なことは、誰もが日々の暮らしに安心と安らぎが感じられるまちづくりです。

そのため、子育てや保健・医療・介護・福祉などの分野において質の高いサービスが提供されるよう、そして、防災や防犯などの分野では行政と民間、地域が一体となって市民の生命・財産を守る仕組みづくりに取り組みます。

また、人々の生活を支える道路や水道、都市の規模に適したコンパクトで質の高い公共施設などの都市基盤を維持していきます。

こうした安心と安全を基礎として、子どもから高齢者まで、障害の有無、性別、国籍に関わらず、誰もが人と人のつながりの中で、お互いを尊重し合い、それぞれが望む生活や夢の実現に向けて一歩先に進むために、温かく支え合う「安らぐまち」を目指します。